

異文化理解に重点を置いたティームティーチング

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 19GP407 氏名 平田 貴和

1 はじめに

本稿では、異文化理解に重点を置いた新たな取組を実践することで TT(team-teaching)の改善を目指し、外国語活動を通じて生徒の異文化に対応する力を高めることを目的としている。

文部科学省（当時の文部省）が JET プログラム(The Japan Exchange and Teaching Programme)を導入¹⁾してから約 30 年が経過した。多くの ALT が日本に招聘され、日本人英語教師(JTE: Japanese Teacher of English)との TT が実践されている。欧米をはじめ、アフリカやアジア、中米からも招聘されており²⁾、それぞれの ALT が持つ文化的背景も多岐にわたる。また、「日本と諸外国の人々の相互理解を深める」という目的から、『教育の学位や教員免許または TESOL/TEFL³⁾の資格は、JET プログラムに参加するための要件ではない』『どの分野の学士号でもかまわない』『教員経験は JET プログラムに参加するための要件ではない』⁴⁾等の応募要件を設定し、幅広い応募者を受け入れている。そのような多様性を持った ALT との TT を実践することにより、ALT 一人ひとりが持つ出身国の文化に関わる要因についての理解を深めることが、異文化理解につながると考える。

一方で、「学校組織の在り方」「教育制度・方針の相違」「教授法・指導方法等の相違」等の様々な異文化的要因による誤解や行き違いも生じている。高等学校の英語科教員である筆者は、これまでベース校 2 校において ALT とともに TT に取り組み、ALT との協働の中で国際理解や外国語教育の重要性を実感してきた。筆者の勤務校においても、JTE と ALT 双方の文化についての理解不足から ALT が疎外感を感じる等の問題が生じている。

これらの問題に対して、上西(1999)のアンケート調査によれば、「TT を成功させるために、一番必要なこと」として 39%の JTE と 55%の ALT が「よりよい人間関係」と答えている。JTE と ALT が良好な人間関係を構築するためには、お互いの文化について理解を深めることが必要である。さらに、外国語教育を受ける生徒も ALT が持つ文化的背景についての知識が不足していれば、異文化間のコミュニケーションツールとしての英語を学ぶ楽しさを十分に実感することができない。

藤原(2012)は、英語が、英語母語話者との会話で用いられる言語に留まることなく、第二言語として英語を学ぶ世界中の人々とコミュニケーションをとるためのツールとして捉え直されていると述べている。また、異文化理解の必要性が指摘される一方で、教育現場では異文化理解のための英語とは何なのか、英語の授業を通してどのように異文化理解を促すのかが問題となっていると指摘している。清水(2019)は、平成 30 年告示の学習指導要領外国語の目標において、コミュニケーションを図る資質・能力の一つに「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と異文化理解力の必要性が示されているが、具体的な達成目標や指導方法に関してはほとんど言及されていないと述べている。この点については、藤原(2012)も、授業で異文化理解をどのように取り扱うのかは、教師一人ひとりの技量によるところが大きいと述べている。

藤原(2012)は、日本の英語教育は、国際コミュニケーション能力の育成及び国際理解す

なわち異文化理解が理念上の特徴であると考えている。JTE と ALT が信頼関係を構築しながら生徒のコミュニケーション能力を伸ばす取組自体が異文化理解であると言える。

一般的に異文化理解とは、その国や国民が持つ価値観、言語、信仰等を理解することである。文化が異なる国民は異なる価値観を持っており、双方がそのことを前提にしなければ異文化間のコミュニケーションは成立しない。本研究における異文化理解とは、英語教育の中で異文化間のコミュニケーション能力を育成することを指す。

このような現状を踏まえ、異文化理解を重視した TT の在り方を探るために本稿では以下の目的を設定した。

- ・生徒の異文化間コミュニケーション能力を育成する TT を実践する。

新しい取組を実践することによって、グローバル人材として世界で活躍できる様々な異文化に対応できる力を持った生徒を育成することができると考え、本主題を設定した。

2 昨年度までの研究の経過

<ベース校の ALT を対象とした、勤務についてのインタビュー調査>

高等学校のベース校に勤務している ALT 個人が持つ要因や TT の実態について把握するため、筆者の勤務校である A 高校を含め 3 校において ALT、生徒、英語科教員を対象にインタビュー調査を実施した。結果は表 1 のようになった。ALT の勤務年数、志望理由、教職経験の有無、異文化理解・日本語理解の程度についても多様性が見られた。調査結果から以下の課題が浮かび上がった。

A:ALT は日本の学校文化について理解が不足しており不安を感じている。

B:生徒は ALT と相互の異文化理解を深めたいと望んでいる。

これらの課題を踏まえ、ALT が日本の学校文化を理解し、ALT 通信の発行等、経験や知識を生かした教育活動を行うことが異文化理解に基づく TT の実践につながると考えた。調査結果を基に、課題解決に向けた新規の取組(表 2)を考案した。研究目的の達成のために「ALT と生徒・JTE が相互の文化について理解を深める活動」を中心に構成した。

表 1 ALT, 生徒, JTE からの意見

【ALT を日本の学校文化理解につなげる取組】	<ul style="list-style-type: none"> ・ESS(English speaking society)での指導, ディベートやスピーチコンテストに参加する生徒の指導 ・定期考査での英作文の採点 ・英語資格試験の面接練習や, 大学入試対策の補助 ・朝の玄関指導等, JTE の業務への参加 ・学校設定科目(英語の授業等)の中での ALT の活用
【ALT からの要望】	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学力や勤務校の特徴等を知りたい。 ・授業の進め方について知るために授業を見学したい。
【ALT について生徒からの意見】	<ul style="list-style-type: none"> ・ALT が日本の文化や教育制度を理解していると, より効果的な授業になると思う。 ・ALT との TT では, 異文化について生の情報を入手できる。
【ALT について JTE からの意見】	<ul style="list-style-type: none"> ・授業以外の様々な活動にも積極的に協力してくれる。 ・他教科の授業を見学する等, 異文化理解にも積極的である。さらに ALT が参加する機会を増やしていきたい。 ・ALT の日本の教育文化についての理解が不足している。

3 本年度の研究の背景

(1) JTEによるTT

昨年度末に前任 ALT が転職し、今年度は訪問指導を行う予定だった県教委所属の ALT が帰国したため、1 学期は JTE が TT を行うこととなった。2 学年文類型 3 クラスを対象に JTE がペアを組み、学校設定科目「表現探究」を TT の形式で行った。JTE のみで TT を実施することに当初不安も感じたが、自らが ALT の役割を演じる過程で ALT の役割や TT 実施上の留意点について主体的に考察することができた。その中で、「コミュニケーション不足による行き違いや誤解を避けるための「綿密な事前打ち合わせ」「TT 実施後の振り返りとその共有」「ALT に任せるのではなく、ALT と協働する意識」が重要であるということがわかった。これらの気づきを活かして新規の取組（表 2）の内容を調整した。新規の取組は 5 つ予定していたが、「授業見学シート」「学校紹介」「ALT 通信」は新任 ALT と協働で実践することを想定していたので今年度の実践は見送ることとした。今回実践できなかった取組については将来実施する予定である。

表 2 異文化理解を重視した TT 改善のための新規取組

担当者，実施時期	新規の取組	実施方法	解決される課題 (A)～(B)	仮説
ALT，平田 (新任赴任時)	授業見学シート	他教科を含む授業を JTE とともに見学することで ALT に日本の学校教育について理解させる。	A	新任 ALT が赴任後速やかに指導法の相違等の異文化的要因を理解すれば、安心して業務を始めることができる。
TT 実施学年の生徒 (新任赴任時)	学校紹介 (校舎，校歌，沿革，特色，部活動等)	事前に ALT から質問を受けつけ，TT 内のグループワークで解答を用意させて，発表させる。	A B	ALT の勤務校理解が深まる。生徒の英語表現力やプレゼンテーション能力が高まる。
ALT (毎月)	ALT 通信 ・自己紹介や出身国の紹介等，幅広いテーマについて英文で紹介する。	全校生徒と教職員に配布する。 TT の教材として扱う。	B	ALT が発信した情報を TT の教材として活用することで，生徒の異文化理解につながる。JTE 以外の教員との会話のトピックとして活用することで ALT が勤務校に打ち解ける。
JTE，ALT (毎回)	TT の振り返りシート	TT 実施後に入力し，JTE と ALT が共有する。	A	ALT と JTE が振り返りシートに感想を記録し，共有することで TT の改善に向けた話し合いを円滑に持つことができる。
ALT，平田 (11月)	研究授業 <コミュニケーション英語 II>	教科書の題材に基づく異文化理解の実践	B	教科書をベースとした，異文化理解に重点を置いた授業を実践することで生徒と ALT 双方の異文化理解が進む。

(2) ALTによる訪問指導の開始

9月から月に数回、水曜日の午後に表現探究の授業に合わせて、近隣のベース校からALTが訪問指導を行うことになった。年度途中の非常に慌ただしいスタートとなった上に、ALTの滞在時間も常駐のALTに比べるとかなり短かったが、本研究について説明したところ協力を快諾してくれた。メールでのやり取り等を通じて、新規の取組について多くの意見や助言を得た。TTの再開に合わせて新規の取組を開始した。

4 新規の取組の実践

今年度は「TTの振り返りシート」「研究授業」を中心に、ALT、JTE・生徒間の異文化理解に重点をおいた新しい取組を実践した。

(1) 生徒対象のアンケート

新規の取組によって生徒の理解度や満足度がどのように変化するかを検証し、異文化理解を深めるためにはどのような授業を行うべきか、生徒からの意見を聞き出す目的で、取組開始前の7月と研究授業を実践後の12月に生徒対象のアンケート調査を行った。

(2) TTの振り返りシート

ALTとJTEがTT実施後に毎回Effective points of the classとPart that could be improvedを書き溜めた。定期的にそれに基づく意見交換を行い、ALTとJTE双方に授業を客観的に見直す姿勢を定着させることによって、生徒のコミュニケーション能力を伸ばすTTを実践することが期待できる。12月にALTとJTEへのインタビュー調査で効果を検証した。

(3) 研究授業

11月に研究授業を行った(Appendixに指導案)。コミュニケーション英語の教科書を用いたTTの中で、ALTを活用した異文化理解につながるTTの在り方について探った。バイオミクラーについての調べ学習の内容をALTと生徒が共有することにより、ALTと生徒が相互の出身国における科学技術について理解を深めることを目的とした。

授業前にJTEとALTに記述式のアンケート調査用紙を配付し、感想や改善策等の記入を依頼した。授業後には英語科教員との省察検討会を行い、ALTからは後日メールでコメントを回収した。

5 結果

(1) 生徒対象アンケートの結果

アンケート作成時から状況が大きく変化したためALTの訪問回数も少なく、前任ALT在籍時と異なり継続的なTTを実施できなかったことから、『ALTとのチームティーチングにおける「伸ばす力」についてのアンケート』としては数値上変化が見られなかった。しかし、「チームティーチングの中で異文化理解を深めるためにはどのような活動が効果的か」という設問の回答を通じて、生徒からTTの改善に向けて参考となる様々な意見を集めることができた。記述内容から、以下のように大きく「ALTが主体の活動」「生徒が主体の活動」「その他」に分けて整理することができた。

＜ALT が主体の活動＞

- ・授業の内容に関して ALT からの意見を聞くことで、異文化理解につながる。
- ・ALT 側から見た日本のイメージや考え方の差異について知ると効果的だと思う。
- ・5分ほどで ALT の地元の話や日本で驚いたこと等を話してもらおう。

＜生徒が主体の活動＞

- ・ALT と日常の話題について話す時間があればよい。
- ・ALT の居住地と日本の違いをもとにディベートするのも効果的では。
- ・ALT の出身地の文化を調べ、それについてのプレゼンをしてもいいのでは。
- ・関係する英語の文献購読。
- ・教科書で学んだ表現や単語を使えるということを実感できた。
- ・日本独自の文化を探してみても他国の文化と比較する。

「その他」

- ・ALT にもっと話してほしい。TT が楽しい。
- ・ALT の地元の話や授業のテーマと結び付けて話してもらいたい。
- ・ALT に母国について話してもらおうと、リスニング能力を向上させながら異文化理解ができる。
- ・班を作って ALT の母国の文化について調べ、発表し、ALT に補足説明してもらおうことで異文化が理解できる。

(2) TT の振り返りシート

TT 授業後に、毎回 JTE, ALT それぞれに振り返りシートの記入を求めた。その結果は以下のとおりである。

JTE からの意見・感想（一部抜粋）

- ・授業での実践内容を文字化することで、客観的に振り返る機会が得られた。
- ・前回の授業との比較から、今後の改善に向けた課題を見つけることができる。

ALT からの意見・感想（一部抜粋）

- ・授業後すぐに明確な振り返りを記録できるので、TT の改善に直結している。
- ・より明確なフィードバックのために、数値で評価できる追加の質問を設定してもいいのではないか。そうすると、授業の目的も明確になると思う。

例) "How well did we encourage students to speak English: 1 / 2 / 3 / 4 / 5.
Why: _____."

- ・前回と同じ内容であれば、"same lesson plan"に丸をつけ、前回と異なる点は "any differences? _____"と記載すれば、より簡潔なものになる。
- ・JTE と ALT が、その日の授業のうまくいった点とそうではなかった点についての振り返りを共有することができればよい。
- ・ALT と JTE の振り返りシートの様式をそれぞれのものにすると、さらにそれぞれの立場に特化した質問ができる。

(3) 研究授業

＜研究授業の様子＞

バイオミクリーについての調べ学習の共有を通じて異文化理解を深めることを目的とした。予め事前学習シートを配付し、インターネット等でバイオミクリーの例を検索した

上で、それについて英語で説明できるように準備させた。当日は、ペアワークで調べた内容を共有させた。普段の授業で頻繁にペアワークを実施しており、自分の考えを英語で表現することに慣れているクラスであるが、今回は自筆のイラストや画像も用いて、相手が理解しやすい簡潔な英語表現で伝えるよう指示した。冒頭で ALT と JTE がデモンストレーションを行い、タブレット型端末とスクリーンを用いて生徒に伝わりやすいプレゼンテーションの例を示した。それを参考にして、生徒は落ち着いて発表に臨んでいた。絵を描くことが得意な生徒がイラストを用いて説明し、インターネットで調べた説明文をパートナーが理解しやすいよう簡単な表現に言い換えて伝える等、それぞれの生徒の創意工夫が見られた。生徒同士がお互いの興味関心を引きつけるよう努力している姿から、コミュニケーション能力の育成につながる活動であると感じられた。

研究授業後に、JTE, ALT, 生徒にアンケートの記入を求めた。その結果は以下のとおりである。

JTE から（一部抜粋）

- ・教科書ベースの TT の授業を見る機会がなかなか無いので、勉強になった。
- ・ALT と JTE の役割分担について十分話し合われていたようで、スムーズに進行できていた。
- ・生徒が意欲的に参加していた。躊躇することなく英語を話していた。
- ・生徒との対話の中で異文化理解が深まる場面があり、ALT との TT だからこそできる活動だと思った。
- ・何気ない異文化理解こそ TT の意義である。ALT の存在そのものが異文化理解と考えて、できるだけ活用していけばよいと思う。

ALT から（一部抜粋）

「授業中の生徒の反応」について

生徒が発言する際は、クラス全体が盛り上がっていた。

「ALT と JTE のかかわり」について

自分が JTE にしっかりとサポートされていると感じた。授業中にありのままの自分であることができた。ALT にとって、クラスと教材について十分な知識をもち、授業前に十分な準備がなされていることがとても重要である。ALT に自信を持たせることが信頼関係を構築するためには必要である。

授業前に、授業で求められるものは何かを確認し、教材についての説明を受け、JTE に質問するための十分な時間があった。授業中も十分にコミュニケーションがとられていた。これらは柔軟な姿勢で授業に臨むために不可欠である。

「教科書ベースのチームティーチング」について

教科書の題材は時として量が多く、無味乾燥なものになりかねないが、発話の活動を入れることによって、インタラクティブな、楽しいものにできる。

「チームティーチングにおける異文化理解」について

ALT が自分の役割を理解しているかどうかは、授業、成績、他の教員そして ALT の日本での生活に影響を与える。ALT が授業の全てに関わるのではなく、JTE が授業中に特別な役割を ALT に与えてくれることが好ましい。今回のように授業に先立って十分なコミュニケーションを JTE ととることは極めて重要である。生徒に対して自分が貢献できていないと感じる時は、とても気分が悪い。

ALT に授業内の一定の時間が割り当てられ、十分に準備をした上で授業を行うと、よ

り生徒にとって魅力的な授業の実践につながる。

その他

繰り返しの作業は TT をワンパターンなものにしてしまう。ALT の役割は、生徒に英語を学ぶことの恩恵つまりネイティブスピーカーとのコミュニケーションを体感させることである。

生徒から（一部抜粋）

- ・将来、英語でのコミュニケーションが必要となるので、授業でそういった場を設けてもらえるのはとても有難い。
- ・英語で表現する機会が多いため英語力の向上につながっている。
- ・ネイティブの発音に触れられる貴重な機会であるので、ALT にもっと話して欲しい。

6 考察

（1）生徒対象アンケート

TT の中で異文化理解を深める取組は、出身地の紹介、日本での体験談等の「ALT が主体の活動」と、ALT の居住地と日本の違いについての情報交換、ALT の出身国と日本の文化の違いについてのプレゼンテーション、英文での自己紹介等の「生徒主体の活動」に分類できる。これらの取組を行うことにより、ALT と生徒が出身国の文化について理解を深め、それぞれの違いを認識することができる。アンケートの結果から、生徒が TT の授業の中で、コミュニケーション能力を高めることと、ALT から直接発音についての指導を受けることを望んでいることが窺えた。

（2）TT の振り返りシート

＜JTE からの意見＞

JTE 自身が授業での実践内容を振り返ることで、改善に向けた課題を把握することができた。これまでの教員生活の中で、授業の中で異文化理解を扱うことについて考えることは少なかったが、今回、授業についての振り返りを文字化する機会を得て、異文化理解の重要性について考えることができた。勤務校の前任 ALT も、昨年度インタビュー調査を行った際に、授業の振り返りの必要があると述べていた。生徒の異文化理解に効果のある活動を実践するために、JTE と ALT が指導方針や今後の課題についての話し合いを重ねる必要がある。

＜ALT からの意見＞

ALT の意見から、振り返りシートを活用すると、授業後すぐに明確な振り返りを記録でき、TT の改善につながるということが窺える。JTE と ALT が異なる様式を用いて省察を記入し共有することで、効果的な指導方法について意見を出し合うことができ、TT の改善につながると考える。

この取組は、直接生徒の異文化理解につながるものではないが、今後の TT の改善のためのヒントとなるコメントが見られた。形式に修正を加えながら反省点をその都度改善していくことで、異文化理解が深まることが期待できる。

（3）研究授業

レッスンの本文に関連する具体例を ALT に紹介してもらうことにより、教科書の題材をよりわかりやすく身近なものとして生徒に理解させることができるとということが窺えた。

TT における異文化理解は、ネイティブスピーカーである ALT とのコミュニケーションを生徒に体感させることで深まる。調べ学習の内容を生徒が発表し、ALT がそれに対してコメントを述べることによって、クラス全体の異文化理解への意識を高めることができた。この授業の最大の収穫は、生徒同士で行っていた情報や考えの共有の輪の中に ALT を加えることによって、教科書の題材を用いた TT の中で異文化理解ができるということを生徒と JTE に気づかせることができたことであった。

<JTE から>

JTE の多くが、他の生徒との情報共有や協働的学習が生徒にとって効果的な学びであると考えている。異文化理解に関わる TT の授業を見る機会がなかなか無いという意見があった。そのような授業が頻繁には実施されていない原因として、「生徒の学力向上や進路目標達成を考えると、異文化理解を重視した指導の実施は難しい」という考えが JTE の間に根強く残っていることが考えられる。筆者の以前の勤務校においても、大学入試に対応するためには、必ずしも TT が必要であるとは言えないという JTE からの意見を何度か耳にした。しかしながら、今後はより一層国際化が進み、日本国内で勤務する場合でも、グローバルに仕事をする機会が増えていくと予想される。日本とは異なる文化を持つ国の人々とコミュニケーションをとりながらビジネスを進めることが必要になる。そうした現状を踏まえ、JTE 自身が柔軟な姿勢で指導方法の改善に取り組まなければならない時期が来た。先進的な取組を実践している他校の視察や、研修への参加、授業研究を通して JTE のスキルアップを図る必要がある。

「生徒との対話の中で異文化理解が深まる」「ALT の存在そのものが異文化理解」というコメントがあった。異文化理解のための特別な指導を行うというよりも、JTE 一人ひとりが「第二言語として英語を学ぶ世界中の人々とコミュニケーションをとるためのツール」としての英語を学ぶことの大切さ、楽しさを生徒に伝え、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を TT の中で生徒に示すことが異文化理解教育につながると言える。

<ALT から>

ALT が、効果的な TT を実践するために JTE に望んでいることを把握できた。JTE が、ALT に授業の目的やクラスの状況、教材等についての情報を提供し、授業前に十分な打合せの時間を持つことが、ALT と JTE の信頼関係を構築するために必要である。

教科書を用いた学習を魅力的なものにするためには、ALT の個性を活かしたコミュニケーション活動を入れることが重要である。生徒に、ネイティブスピーカーとのコミュニケーションの楽しさを体感させることが、生徒のコミュニケーション能力を高めることにつながるということがわかった。

7 今後の課題

本研究を通して、生徒の異文化理解を深めるためには、外国語活動を通じて相手を理解し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢を育てることが必要であることが示唆された。今回研究テーマとした「異文化理解に重点を置いたティームティーチング」は、ALT ベース校との連携や、ICT 機器の活用による諸外国との交流を通じて取り組むことにより、校種を問わず全ての学校において実践が可能であると考えられる。英語が小学校で教科化する等、教育活動のグローバル化が進んでいる現代社会において、英語がコミュニケーションツールとしての重要性をさらに高めている。

筆者の勤務校は、地域を代表する進学校として、生徒の進路目標達成に向けた学力の向

上と、これからの日本社会に貢献できるリーダーの育成を使命としている。英語の授業では、大学入試問題で出題されたテーマを教材として扱う等、大学受験に向けた英語力の育成に取り組むだけではなく、生徒が自ら設定した課題の解決に取り組む探究的な学習活動を実践している。今後は、各地域の諸学校が他校種との連携も視野に入れ、児童・生徒のコミュニケーション能力を高める英語教育活動に取り組む必要がある。今後もこのことを念頭に置き、JTEの一人として生徒が異文化理解を深めることができるTTの在り方について模索し、外国語教育を通じて国際化社会で活躍できる人材の育成に尽力していきたい。

注

- 1) 一般財団法人自治体国際化協会 (CLAIR) ホームページ「JETとは－歴史」を参照。
<http://jetprogramme.org/ja/history/> 閲覧日 2020/01/14
- 2) 一般財団法人自治体国際化協会 (CLAIR) ホームページ「JETとは－参加国」を参照。
<http://jetprogramme.org/ja/countries/> 閲覧日 2020/01/14
- 3) TESOL teaching of English to speakers of other languages 他言語話者に対する英語教育 (法)
TEFL Teaching English as a Foreign Language 外国語としての英語教授 (法)
- 4) 一般財団法人自治体国際化協会 (CLAIR) ホームページ「JET参加希望者－よくある質問」を参照。
<http://jetprogramme.org/ja/faq01/> 閲覧日 2020/01/14

引用文献

- ・ 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示)
https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf 閲覧日 2021/01/18
- ・ 上西幸治 (1999) ティームティーチングに関する調査・研究－JTEとALTの意識を比較して－
中国地区英語教育学会研究紀要 29, 39-47.
- ・ 藤原愛 (2012) 異文化理解に対する学習者の意識調査 育英短期大学研究紀要第 29, 43-52.
- ・ 清水覚子 (2019) 高等学校外国語における異文化理解教育の扱い方について：英語専門科目「異文化理解」の実践を通じた考察 東京学芸大学教職大学院年報 7:57-68

(Appendix)

外国語科（科目 コミュニケーション英語Ⅱ）学習指導案

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等	時間
導入	・ Section3 の内容推測	ALT の音読を聞き、段落ごとに日本語で概要を述べる。	段落ごとの概要を数名の生徒に答えさせる。 ＜留意点＞ 簡潔に要点をまとめるよう指導する。（ALT, JTE）		5分
展開	・ 新出単語と本文の発音練習	ALT に続いて新出単語と本文の発音練習を行う。	新出単語と本文を読み上げ、リピートさせる。 ＜留意点＞ 生徒の反応を見ながら速度を変え、繰り返す等配慮する。（ALT）		5分
	・ 内容理解	文構造や文法事項について JTE の質問に日本語で答えながら理解を深める。	本文を音読し（ALT）、構文や文法事項を説明する。（JTE）	文法事項を理解し、内容を把握できている【理解】（観察）	10分
	・ 本文のオーバーラッピング、シャドウイング	オーバーラッピングとシャドウイングで英語の自然なリズムに慣れる。	本文を音読する。（ALT） ＜留意点＞ 途中で諦めずに取り組むよう促す。（JTE）	積極的に音読練習に参加している【関心・意欲・態度】（観察）	6分
	・ リテリング	ペアを組み、交替で Section3 のリテリングを行う。	リテリングをする生徒には教科書を閉じさせる。 ＜留意点＞ 本文の暗唱ではなく、自分の言葉で概要を伝えるよう助言する。（JTE）	内容を整理しながら英語で伝えようとしている【表現】（観察）	6分
	・ バイオミミクリーについての調べ学習の共有	バイオミミクリーの例について各自で事前に調べ学習を行い、ペアワークで共有する。	情報共有のデモンストレーションを行う。（ALT, JTE） ＜留意点＞ 表現探究の授業で培った「わかりやすく伝える技術」を活用するよう助言する。（JTE）		15分
まとめ	次回の授業についての指示		予習範囲や単語テストについての連絡（JTE）		3分